OCC メディカル・カフェ ニュースレター 『賢明な寛容:the wise patience』 第7号 2023 年 7月 発行『お茶の水メディカル・カフェ in OCC』

ニュースレター第7号をお届けいたします。 今号は樋野先生のお言葉とスタッフの森が担当します。

愛がなければ全ては無意味 ~ 心がこもっている ~

樋野興夫(順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長、恵泉女学園理事長)







2023 年 7 月 15 日『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』に出席した。 『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』は、東日本大震災の 2011 年に創設準備がなされ、2012 年に当時 OCC 副理事長であった今は亡き榊原寛先生が始められた。

私は、今回の挨拶で、ヘレン・アダムス・ケラー(Helen Adams Keller、1880-1968)についてさりげなく語った。【ヘレン・ケラーは、2歳の時に高熱にかかり、聴力、視力、言葉を失い、話すことさえ出来なくなった。 家庭教師として派遣されてきたのが、当時20歳のアン・サリヴァン(1866 -1936)であった。 サリヴァンは その後約50年にも渡って、よき教師として、そして友人として、ヘレンを支えていくことになる。 ヘレン・ケラーが『人生の眼』を開かれたのは『いのちの言葉』との出会いである。『I amonly one, but still I amone. I cannot do everything, but still I can do something; And because I cannot do everything I will not refuse to do the something that I can do. 「私は一人の人間に過ぎないが、一人の人間ではある。 何もかもできるわけではないが、何かはできる。 だから、何もかもは出来なくても、出来ることを 出来ないと 拒みはしない」』(ヘレン・ケラー)】

また、【鵜鷺(うさぎ)小学校の卒業式の来賓の挨拶『少年よ、大志を抱け』。 1887 年 札幌農学校のクラーク (William Smith Clark、1826 - 1886) の言葉。 その後、札幌農学校の2期生でクラーク精神を引き継ぐ『内村鑑三 (1861-1930)・新渡戸稲造 (1862-1933)』が、私の人生の機軸として導かれ、『南原繁 (1889-1974)・矢内原忠雄 (1893-1961)』との間接的な出会いも与えられた。 英文で書かれた『武士道』 (新渡戸稲造)と『代表的日本人』 (内村鑑三) は、若き日からの座右の書となった。』と語った。

今回は、【愛がなければ全ては無意味 & 愛に溢れた雰囲気 の『お茶の水メデイカル・カフェ in OCC』】の原点回帰の貴重な時であった。

2016 年に、私は初めて OCC メディカル・カフェに参加しました。心身共に辛い時期でした。樋野先生からの"カフェを始めれば良い"の言葉を胸に、目白がん哲学外来カフェの開所を数ヶ月後に控え、緊張していました。

榊原先生は、OCC の8階でエレベーターが開くと、必ずそこにいらっしゃいました。両手を差し伸べ"よく来てくださいました"と笑顔と握手で迎えてくださいました。「目白でカフェを開きます。心配で…」と話すと、満面の笑みで「大丈夫。あなたには、みんながいるから」と、お言葉をくださいました。おかげさまで、目白カフェはこの8月に7周年を迎えました。

樋野先生は「良い事は、誰にも相談せずにやる。悪い事は、みんなと相談する。言われた事を嫌と言わずにやる」と、背中を押してくださいました。榊原先生は、折々に「大丈夫」、そしてしばらくすると「大丈夫でしょう」、そして「これからも、きっと大丈夫」と、お言葉をかけ続けてくださいました。先生方の言葉を思い起こすたび、「何を言ったかではなく、誰が言ったか」ということにも大きな意味があるのを感じます。

OCC カフェには、あの時の自分のような、不安と緊張の中にいる方が毎回いらっしゃいます。そんな方々に、あの時の榊原先生のように接したいです。初心を忘れず、樋野先生の教えにある"空っぽの器"を用意して、OCC スタッフの皆さんと力を合わせ、底の抜けない頑丈な器を支えていく。それを地道に続けていきたいです。これからも、よろしくお願いいたします。

目白がん哲学外来カフェ代表/お茶の水メディカルカフェ in OCC スタッフ 森尚子





